

ライト・[イン] サイト：光と知覚の年表

Light InSight: Chronology of Light and Perception

古代	
前15000-10000	ラスコー、アルタミラの洞窟壁画
前3000	ろうそくの発明
前2613-2563	ギザのピラミッド
前1346	アメンヘテプ4世によるアマルナ改革（太陽神アテンのみの崇拜に切り替える。アテンは先端に手をもつ光線を放射する日輪として表現）
成立年不明	ゾロアスター教：光の神アフラ・マズダーを最高神とする
前540頃	ピュタゴラス：視覚を温かい蒸気として、眼を太陽の入口として考える
前5世紀	エンペドクレス：眼の内部に火と水の孔があり、明るいのが火、暗いものが水によって認知されると考える
前5-4世紀	レウキッポス、デモクリトス：視覚対象から流出したエイドーラ（映像）が衝突することで視覚が生じると考える
前450-250	墨子『墨子』（ピンホールカメラや曲面鏡による像を論じた光学の章を含む）
前447-432	アクロポリスのパルテノン神殿
前360	プラトン『ティマイオス』（視覚が眼の内部の炎と視覚対象との合一によって形成されることを提起。鏡、色彩についての言及も含む）
前360	プラトン『国家』（洞窟の比喻）
前350	アリストテレス『魂について』『感覚と感覚されるものについて』（視覚作用が炎によることや、光が物體的流出であることを否定し、光は透明なものが現勢化した、透明な中間媒体の状態であることを提起）
前300	エウクレイデス（ユークリッド）『光学』（視覚円錐の概念を発展させる。光の直進と反射の法則について）
前214-112	アルキメデスがローマ軍に対し、光を武器として使用したという伝説が残る（真偽については現在まで諸説ある）
前180頃	丁緩：回り灯籠（1834年に発明されるゾートロープと同様の装置とされる）
前150	ヒポクラテス：アストロラーベ（天体観測用機器）
前1世紀	ルクレティウス『物の本性について』（物の〈映像 simulacula〉を、物体の表面から剥がれた薄膜のようなものと定義）
62頃	アレクサンドリアのヘロン『反射光学 Catoptrica』
63	セネカ『自然研究』
118-128頃	バンテオン（〈眼窓 oculus〉と呼ばれる、円形天窓の開開口部から光が射し込む）
3世紀中葉	マニ教開教（対立する光と闇の混合と、その分離過程からなる神話をもつ）
301	プロティノス『エネアデス』完成（一者・ヌース・魂を光の三つの位相として把握）
416	アウグスティヌス『三位一体論』（光による三位一体論を説く）
中世	
6世紀初頭	偽ディオニシウス・アレオバギタ『ディオニシウス文書』
526-547	サン・ヴィターレ聖堂（ラヴェンナ）
532-537	アヤソフィア（ハギアソフィア）大聖堂
6世紀	サン・タポリナーレ・イン・クラッセ聖堂（ラヴェンナ）
650頃	クルアーン成立
850頃	アル＝キンディー『De aspectibus』（光を鏡に集めることで遠隔から点火する現象の研究など）
1015-1021	イブン・アル＝ハイサム（アルハーゼン）『光学の書』（視覚は眼から対象に発出する光ではなく、外部の光が射し込むことによって生じることを提起し、視覚論に革命的な転回をもたらす。凹面鏡による光の屈折研究や、カメラ・オブスクラを用いた視覚の研究を含む）
1144	シュジェ《サン＝ドニ大聖堂》（偽ディオニシウス〔→6世紀初頭〕の光の思想が強く反映され、ヴォールトによるガラス窓の開放がより多くの採光をもたらす）
1194	シャルトル大聖堂、建造開始（-1250）
1225-40	グロステスト『光について』（世界は自己増殖・拡散する光によって生成するという、光の形而上学を提起）
1265頃	アクィナス『神学大全』執筆
1267	ロジャー・ベーコン『大著作』（拡大鏡の発明。カメラ・オブスクーラの改良。凹面鏡の焦点および球面収差を発見）
1275頃	ウィテロ『光学 Perspectiva』（光の屈折や虹の研究）
1277-79	ベッカム『Perspectiva Communis』
1284頃	サルヴィーノ・アルマーティ：装着可能な眼鏡を発明（眼鏡の発明者に関しては諸説ある）
13世紀後半	ノートルダム大聖堂
13世紀後半	『ゾーハル（光輝の書）』成立
14世紀後半	フェオファン・グレーク《キリストの変容》（光り輝くキリストからほとぼる光線の表現）
1413頃	ブルネレスキ：サン・ジョヴァンニ洗礼堂を描いた板絵を、鏡と箔を通じて現実の風景に投影する透視図法の装置を制作
1426頃	マザッチョ《三位一体》（一点透視図法による現存最古の作品）
1430-32	フラ・アンジェリコ《受胎告知》
1434-36	ヤン・ファン・アイク《アルノルフィニ夫妻の肖像》（凸面鏡の描写）
1435	アルベルティ『絵画論』（眼の奥を底辺とする光線のピラミッドによって視覚を記述し、絵画をそのようなピラミッドを表現した切断面として把握する）
1445-46	クザーヌス『光の父の贈りもの』
1447	グーテンベルク：活版印刷技術の実用化
1447頃-	ギベルティ『回想録 Commentarii』（アルハーゼン、ベーコンら光学の展覧を含む）
1465-74	マンテーニャ《夫妻の間の天井の眼窓》
1474-82	ピエロ・デッラ・フランチェスカ『絵画の遠近法 De Prospectiva pingendi』
1480-85頃	ヘールトヘン・トット・シント・ヤンス《キリスト降誕》（強いコントラストで光り輝く幼子イエスの表現）
1489-92頃	レオナルドが脳と眼球の断面図と平面図を残す
1492	フィチーノ『光について』
16世紀	
1505	コジモ《キリストの顕現と聖者たち》（降り注ぐ顕現の光を見上げる聖母の表現）
1508-12	ミケランジェロ《システィナ礼拝堂天井画》
1508	レオナルド：眼球の解剖に取り組む。眼と瞳孔をカメラ・オブスクーラと類比的に把握し、上下反転した映像を再反転させる進路を考案する
1515頃	グリューネヴァルト《復活》
1521	マウロリコ『Photismi de lumine et umbra』（出版1611年：カメラ・オブスクーラに関する西洋で初めての適切な理論）
1523-24	バルミジャーノ《凸面鏡の自画像》
1525	デューラー『測定法教則』
1528	テレジオ『色彩について』
1533	ホルバイン《大使たち》（アナモルフォーズによる頭蓋骨）
1544	ゲンマ＝フリシウス『天文と幾何学の光線について De Radio Astronomica et Geometrica』（日蝕を観測し、印刷出版された最古のカメラ・オブスクーラの図を掲載）
1551	カルダーノ：カメラ・オブスクーラのピンホールの代わりに凸レンズを使用することに言及
1558	デラ・ポルタ『自然魔術』（カメラ・オブスクーラが絵画の道具として広まる契機となる。幻灯機と同様の装置についての記述）
1568-69	バルバロ（D. Barbaro）『遠近法実践 La pratica della perspettiva』
1581	ガリレオによる光速度測定（速度に対して距離が近すぎ、失敗に終わる）

- 1590 ヤンセン：複合顕微鏡
- 1592-94 ティントレット《最後の晩餐》
- 1596-1600 エル・グレコ《受胎告知》
- 1600 カラヴァッジョ《聖マタイの召命》(暗い部屋に射し込む光の描写)

17世紀

- 1604 ケプラー『天文学の光学的部分を扱うウイテロへの追加』
- 1608 リッペルスハイ：望遠鏡
- 1611 フォルシウス『Physica』(世界最古の色立体考案)
- 1611 ケプラー『屈折光学』(ケプラー式望遠鏡の記述)
- 1611 アントニウス・デ・ドミニス『視線、透明ガラスのなかの光線、ならびに虹について Tractatus de radiis visus et lucis in vitris, perspectivis et iride』
- 1611 ファブリツィウス：カメラ・オブスクーラによる黒点の観測結果を出版
- 1613 アグイロニウス(Aguilonius)『哲学者と数学者に等しく有用な光学六書 Opticorum libri sex, philosophia iuxta ac mathematicis utilites』(ルーベンス挿絵)
- 1620 シャイネル『眼 Oculus, hoc est: Fundamentum opticum』(黒点の観測)
- 1620 ベーコン『ノヴム・オルガヌム』
- 1621 スネル：屈折法則の発見「スネルの法則」
- 1628 秘書官ホイヘンスがレンブラントの才能を見抜き、宮廷から注文を受ける契機となる
- 1629-33 デカルト『宇宙論——または光についての論稿』(1644年・1677年出版)
- 1635 レンブラント《ベルシャザルの酒宴》(出現した手によって書き込まれた輝く文字の表現)
- 1636 ルーベンス《虹の風景》
- 1637 ロラン《メディチ家の別荘のある港の風景》
- 1637 デカルト『屈折光学』
- 1638 ガリレオ『新科学対話』(光速度測定)
- 1645 ラ・トゥール《大工の聖ヨセフ》
- 1646 キルヒャー『光と影の大きいなる術』(携帯用カメラ・オブスクーラを図解。幻灯機による投影を記述)
- 1651 ホップズ『リヴァイアサン』
- 1652 ファブリツィウス《デルフトの眺望》
- 1656 ペラスケス《ラス・メニーナス》
- 1658-60頃 フェルメール《デルフトの眺望》
- 1660 マリオット：盲点の発見
- 1665-66 フェルメール《真珠の耳飾りの少女》
- 1665 グリマルディ『光と色彩と虹に関する物理学的理論』(光の回折現象の正確な観察。光の波動説への道を開く)
- 1665 ロバート・フック『ミクログラフィア』(顕微鏡による動植物の拡大図を70点掲載する。細胞の発見)
- 1666 ニュートン：光のスペクトル
- 1669 パルトリン：複屈折を観測
- 1675 レーマー：光速度測定(木星の衛星イオの公転周期と地球の公転による到達時間の遅れから光の速度を秒速22万kmと測定。光速が有限であることを示した)
- 1677 スピノザ(1632-) 没(レンズ磨きの仕事に従事し、ライブニッツと光学についての書簡も交わす)
- 1678 ホイヘンス：光の波動説・ホイヘンスの原理『光について』(1690年出版)
- 1685 ツァーン『Oculus artificialis, sive telescopium』(多くの箱形カメラ・オブスクーラを図に掲載)
- 1690 ロック『人間悟性論』(通称「モリヌクス問題」の端緒となる)
- 1692 モリヌクス『新屈折光学 Dioptrica nova』

18世紀

- 1703 ライブニッツ『人間知性新論』完成
- 1704 ニュートン：光粒子説『光学：反射、屈折、光の伝播と色について』
- 1709 バークリ『視覚新論』
- 1725 ル・ブロン『色彩論 Coloritto』
- 1727 シュルツ：硝酸銀の感光性
- 1729 ブーゲ『光の段階についての光学試論 Essai d'optique sur la gradation

- de la lumière』
- 1730 ル・ブロン：三色印刷(メゾチント印刷)、三原色説(赤・黄・青)を発表
- 1733-34頃 シャルダン《シャボン玉》
- 1733 バークリ『視覚論弁明』
- 1738 ヴォルテール『ニュートン哲学要綱』
- 1739 ヒューム『人性論 A Treatise of Human Nature』
- 1740 カステル(L. B. Castel)『色彩光学 L'optique des couleurs』
- 1745 カステル(L. B. Castel)：世界で最初の色彩オルガン(クラヴサン・オキュレル) 実演
- 1749 デイドロ『盲人書簡』
- 1751-1772 デイドロ/ダランベール 編『百科全書』
- 1752頃 フランクリン：避雷針の発明
- 1754 コンディヤック『感覚論』
- 1760 ランバート『測光法 Photometria』(光の正確な科学的測定の開始)
- 1764 リード『心の哲学 An Inquiry into the Human Mind』
- 1766 ハリス(M. Harris)『The Natural System of Colors』
- 1768 イギリスで産業革命が始まる
- 1772 シフアーミュラー(I. Schiffermüller)『色彩体系の試み Versuch eines Farbensystems』
- 1772 ランバート『色のピラミッド Beschreibung einer mit dem Calauschen Wachse ausgemalten Farbenpyramide』(色素の混合図式)
- 1772 プリーストリ(J. Priestly)『The history and present state of discoveries relating to vision, light and colours』
- 1777 ゴヤ《日傘》
- 1777 パーマー『色と視覚論 Theory of Colours and Vision』(色覚の三原色説)
- 1779 ロベール：ファンタスマゴリア
- 1781-2頃 ゲインズバラ、覗き眼鏡を制作
- 1784 ブレー《ニュートン記念堂》計画
- 1786 パーマー『色の理論 Theory of Light』
- 1787 画家ロバート・バーカーが「パノラマ」の特許登録
- 1789 ラヴォアジエ『化学原論』
- 1789 フランス革命
- 1790 ギナン：光学ガラス製造法の確立
- 1791 ベンサム『刑罰理論』(パノプティコンの構想)
- 1791-92 ゲーテ『光学のための寄与 Beiträge zur Optik』
- 1792 ヴンシュ『光の色の研究と観察 Versuch und Beobachtungen über die Farben des Lichts』(色覚の三原色説)
- 1794 ドルトン『色覚に関する驚異の事実 Extraordinary facts relating to the vision of colours』(色盲の自己観察)
- 1795頃 ブレイク《ニュートン》
- 1796 ブレイク《アルビオン・ローズ》
- 1797 マードック：ガス灯
- 1800 ヤング：光エーテル説
- 1800 ハーシェル：ハーシェル式望遠鏡
- 1800 ハーシェル：赤外線

19世紀

- 1801 リッター：紫外線
- 1802 ヤング『光と色の理論について On the Theory of Light and Colours』(光の干渉現象を波動説で説明、色覚の三原色説にも言及)
- 1806 ウォラストンがカメラ・ルシーダの特許を取得
- 1808 フリードリヒ《月虹の風景》
- 1808 ルンゲ《朝》
- 1808 デーヴィー：アーク灯(初の電気による人工光照明)
- 1809 マリユス：偏光
- 1810 ルンゲ『色彩球 Farbenkugel』(色彩体系を球状で図式化)
- 1810 マリユス：複屈折に関する理論
- 1810 ゲーテ『色彩論』
- 1814 ゴヤ『1808年5月3日、プリンシペ・ピオの丘での銃殺』
- 1814 フラウンホーファー：フラウンホーファー線
- 1816 コンスタブル《ワイヴェンホー・パーク》
- 1816 ブリュースター：万華鏡(偏光実験中に発見。翌年に特許取得)
- 1816 ショーベンハウアー『視覚と色彩について』(ゲーテが『色彩論』で記述し

た生理的色彩現象を物理的色彩と結合する試み

- 1817 フィールド (G. Field) 『色彩学 Chromatics, or, an essay on the analogy and harmony of colours 』(色彩と音の調和を類比的に語った著作。19世紀後半まで画家のマニュアルとなる)
- 1818 フレネル：光の横波説
- 1822 ダゲールがジオラマ館を開設 (パノラマを劇場化したもの)
- 1825 プルキニエ：プルキニエ現象 (視感度のずれにより、暗所では青、明所では赤が明るく見える現象)
- 1825 ソーマトロープ
- 1826 ヘイター (C. Hayter) 『A New Practical Treatise on the Three Primitive Colours...』
- 1826 ニエプス「エリオグラフィ」による風景写真の撮影
- 1831 プリュースター『光学研究』
- 1831 プラトー：フェナキストスコープ (スタンファーとほぼ同時期に発明)
- 1832 プラトー：ストロボスコープ
- 1833-40 ミュラー『人間生理学教本 Handbuch der Physiologie des Menschen』
- 1834 ホーナー：ゾートロープ (ヨーロッパ初)
- 1834 フェヒナー『Elemente der Psychophysik』
- 1835 北斎『富嶽百景』(第3版：「さい穴の不二」に雨戸の節穴から射し込む光で障子に富士が上下反転で映る、カメラ・オブスクーラと同様の現象の描写がある)
- 1835-40 ターナー《ノラム城、日の出》
- 1835 タルボット：カロタイプを発明 (ネガポジ方式の写真技術であり、1841年に特許取得)
- 1836 プラトー：アノルソスコープ
- 1838 ターナー《戦艦テメレル号》
- 1838 フェヒナー『Über eine Scheibe zur Erzeugung subjectiver Farben』
- 1839 シュヴルール『Du la loi du contraste simultané des couleurs...』(スーラ、ドローネらの色彩法に影響)
- 1839 ダゲール：ダゲレオタイプを公開 (銀板写真)
- 1839 ベクレル：太陽電池の基本原理となる効果を発見
- 1840 ホイートストーン：ステレオスコープ
- 1842 ドップラー：ドップラー効果 (波の発生源と観測者との速度によって、波の周波数が異なって観測される現象)
- 1843 ターナー《光と色彩 (ゲーテの理論) — 洪水のあとの朝 — 『創世記』を書くモーゼ》
- 1843-60 ラスキーン『近代画家論』
- 1845 ファラデー：ファラデー効果
- 1846 ボードレール「1846年のサロン」
- 1846 ターナー《太陽に立つ天使》
- 1846 カール・ツァイス：カール・ツァイス社設立
- 1846 アングルら画家たちが、写真の禁止を政府に訴える
- 1847 ファラデー：偏光実験
- 1849 ファイゾー/フーコー：2枚の鏡を用いて光速測定
- 1851 ロンドン万国博覧会「水晶宮」
- 1852 ドラクロワ《ディエップの海》
- 1853 オングストローム：放電管からの光のスペクトルが、電極の金属と、放電経路の気体成分によるものがあることを示し、分光学の基礎を築く
- 1856 ガイサー：ガイサー管 (蛍光灯の先駆となる)
- 1856-66 ヘルムホルツ『生理光学教本 Handbuch der Physiologischen Optik』
- 1857 ボードレール『悪の華』
- 1859 フォルクマン：タキストスコープ
- 1860 マクスウェル『色の合成の理論とスペクトルの色との関係 Theory of Compound Colors, and the Relations of the Colors of the Spectrum』
- 1860 フェヒナー『精神物理学要綱』
- 1861 シュヴルール『色の定義と命名の方法 Exposé d'un moyen de définir et de nommer les couleurs 』
- 1861 ヘリング：ヘリングの錯視
- 1861 ファラデー『ろうそくの科学』
- 1865 マッハ：マッハの帯
- 1867 シャルル・ブラン『Grammaire des arts du dessin』(ドラクロワの色彩を理論的に分析し、シニャックらに影響)
- 1867 オングストローム：オーロラの光を分析 (オーロラが太陽と異なる光のスペクトルをもつことを示す)
- 1868 ベンゾン『Principles of the science of colour concisely stated to aid and promote their useful application in the decorative arts』
- 1868 オーロン：加法混色による写真の特許取得 (カラー印刷の原型となる)
- 1870 ルノワール《散歩道》(木漏れ日の描写)
- 1870 ヘリング：心理四原色説
- 1871-73 ヘルムホルツ『Optisches über Malerei』
- 1871 マクスウェル：光の電磁気説
- 1872頃 モネ《印象、日の出》
- 1872 マイブリッジ：走る馬の連続写真撮影に成功
- 1874 通称「印象派展」第1回
- 1874 プレンターノ『経験的立場からの心理学』
- 1875 モネ《散歩、日傘をさす女》
- 1875 クルックス『光の力学的作用』
- 1875-76 ルノワール《陽光の中の裸婦 (試作、裸婦・光の効果)》
- 1876 マラルメ「印象派の画家たちとエドゥアール・マネ」
- 1876 ベル：電話機
- 1876 ヴァーグナー：パイロイト祝祭劇場を完成
- 1877 レイノー：プラキシノスコープ
- 1878 ドガ《手袋をした歌手》(歌手の下から照らす人工光の描写)
- 1878 スワン：白熱電球を発明
- 1878 ウィリー・キューン：オプトグラムの実験 (ウサギの生きた眼球で映像を定着する試み)
- 1878 ジャヴァル：サッカーード (眼球の跳躍性運動)
- 1879 ルード (O. Rood) 『現代色彩学 Modern Chromatics』(視覚混合についての記述がスーラらに影響)
- 1879 エジソン：白熱電球を発明
- 1880 ベル：フォトフォン
- 1880 フーアマン：カイザー・パノラマ
- 1880 ヴント『生理学的心理学綱要』
- 1881 ニーチェ『曙光』
- 1882 マネ《フォーリー・ベルジェールのバー》
- 1882 マイケルソン：光速測定 (秒速299,840km)
- 1882 マレー：クロノフォトグラフィ、写真銃
- 1882 ローランド：凹面格子の考案 (太陽スペクトル研究の発展)
- 1884 ニプコー：ニプコーの円板 (機械式画像スキャン機器)
- 1884-86 スーラ《ラ・グラント・ジャット島の日曜の午後》
- 1886 マッハ『感覚の分析』
- 1887 マイケルソン/モーリー：干渉実験 (エーテル説を否定)
- 1887 フィック：ガラス製コンタクトレンズ
- 1887 フェレ (C. Féré) 『Sensation et mouvement』
- 1888 ゴッホ《夜のカフェテラス》《種まく人》
- 1888 シャルル・アンリ『Cercle Chromatique...』
- 1888 ハイニツァ：液晶
- 1888 ヘルツ：電磁波放射の存在を実証
- 1888 エッフェル：建設中のエッフェル塔 (地上115m) より花火を打ち上げ、尖塔部分を光でシミュレートする
- 1889 ゴッホ《星月夜》
- 1889 エジソン：撮影機「キネマトグラフ」
- 1889 ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』
- 1890 シニャック《フェリックス・フェネオンの肖像》
- 1890 ジェームズ『心理学原理』
- 1890 エーレンフェルス『ゲシュタルト質について』
- 1891 モネ《陽を浴びる積み藁》
- 1891 エジソン：映写機「キネトスコープ」
- 1892 レーベデフ：光圧力を測定
- 1892-94 モネ《ルーアン大聖堂》連作
- 1895 リュミエール兄弟：シネマトグラフ
- 1895 レントゲン：X線
- 1896 ベクレル：放射線の発見
- 1896 ストラットン：逆さ眼鏡による実験
- 1896 ベルクソン『物質と記憶』
- 1896 バラデュック (H. Baraduc) 『人間の魂 L'Âme humaine』(オーラの写真)
- 1897 ブラウン：ブラウン管
- 1897 ブラウン：オシロスコープ

1899 シニャック『ウジェーヌ・ドラクロワから新印象主義へ D'Eugene Delacroix au Neo-Impressionisme』
 1899 テスラ：稲妻実験によりコロラドスプリングズ一帯に大停電を起こす
 1899-1901 フッサール『論理学研究』
 1900 プランク：光粒子説（基本エネルギー単位）
 1900 リュミエール兄弟：パリ万博で大型フィルムによる大画面上映（21×16m）

20世紀

1902 メリエス《月世界旅行》〔映画〕
 1902-06 セザンヌ《ローヴから見たサント＝ヴィクトワール山》連作
 1904-05 マティス《豪華、静寂、逸楽》
 1905 アインシュタイン：特殊相対性理論（真空状態において光速は一定であること、光は粒子と波の両方の性質を持つことを示す）
 1905 マンセル『色彩表記法』
 1906 ブラック《レスタック》
 1906 ブラクトン《Humorous Phases of Funny Faces》（世界初のアニメーションとされている）
 1906 コルン：無線による画像電送に成功
 1907 クロード、リンデ：ネオンサイン
 1907 ローゼング：ブラウン管を用いたテレビシステムの特許取得
 1907 ヘルクソン『創造的進化』
 1908 ボナール《逆光の裸婦》
 1909 マリネッティ『未来派宣言』
 1909 パッラ《街灯》
 1912 カンディンスキー『芸術における精神的なもの』
 1912 ドローネ『光』（後にクレアが翻訳）
 1912 クプカ《ニュートンの円盤》
 1912 ルッソロ《家+光+空》
 1912 ヴェルトハイマー：ファイ現象を記述（適切なタイミングで交互に点滅する異なった光点が移動しているように見える現象）
 1913-27 ブルースト『失われた時を求めて』
 1914 デ・キリコ《白昼の謎》
 1914 タウト『ガラス・パヴィリオン』〔建築〕
 1915-23頃 デュシャン《彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、ささも》
 1916 オストヴァルト『色彩入門 Die Farbenfibel』
 1917 ウィルソン山天文台に2.5mの反射望遠鏡完成
 1918-19 デュシャン《Handmade Stereopticon Slide》（写真と鉛筆の線描によるステレオグラム写真）
 1919 パウハウス設立
 1919 ファニンガー《大聖堂》（『ヴァイマル国立パウハウス設立要綱』表紙）
 1919 モホリ＝ナジ『フォトグラム』
 1919 ブルーノ・タウト『都市の冠（クローネ）』『アルプス建築』〔建築〕
 1920 デュシャン《Rotary Glass Plates (Precision Optics)》
 1920 シュレーディングガー『Grundlinien einer Theorie der Farbenmetrik im Tagessehen (Outline of a theory of color measurement for daylight vision)』
 1920 ヘリング『Grundzüge der Lehre vom Lichtsinn』
 1921 ヴァルター・ルットマン《Lichtspiel Opus I》〔映画〕
 1921 ミース『フリードリヒ街のオフィスビル案』〔建築〕
 1921 シュタイナー『色彩の本質』
 1922 ミース『ガラスのスカイスクレイパー案』〔建築〕
 1922 マン・レイ『レイヨグラフィ』
 1922 クレー《夕の分離》
 1922 ラジオ放送開始
 1922-30 モホリ＝ナジ《光＝空間調節器》
 1923 コンプトン効果（光粒子説）
 1923 アダムズ『色覚の理論』（色覚段階説）
 1923 ツヴォルキン：撮像管（アイコノスコープ）
 1924 W・パウリ：核磁気モーメントを理論的に提案（NMR（核磁気共鳴）への道を開く）
 1924-25 パノフスキー『（象徴形式）としての遠近法』
 1925-26 デュシャン《アネミック・シネマ》
 1925 ベアード：機械式テレビによる静止画像伝送の成功

1926 グロピウス『デッサウのパウハウス校舎』〔建築〕
 1926 ラング《メトロポリス》〔映画〕
 1926 ゲルマー：蛍光灯
 1926 ハンセル：光ファイバー
 1926 高柳健次郎：機械・電子折衷式テレビ（ニブコー円板と光電管を用い、ブラウン管に「イ」の文字を表示させた）
 1927 ルットマン《伯林―大都会交響楽》〔映画〕
 1927 ファーンズワース：光電管、電子式テレビ
 1927 ハイゼンベルク：不確定性原理の提起
 1927 ハンス・ブッシュ：電場または磁場を用いた電子レンズの理論
 1929 ヴェルトフ《カメラを持った男》〔映画〕
 1929 キースラー『フィルム・ギルド・シネマ』〔建築〕
 1929 BBC：テレビ実験放送開始
 1929 世界恐慌
 1930 カッツ『Der Aufbau der Farbwelt』
 1931 エドガートン：フラッシュ
 1931 ベンヤミン『写真小史』
 1932 クノール、ルスカ：電子顕微鏡
 1932 ジャンスキー：電波天文学を開始
 1933 ル・コルビュジェ『輝く都市』
 1933 ツヴォルキン：撮像管（アイコノスコープ）をRCA社で実用化。RCAはアイコノスコープとブラウン管（CRT）を用いた全電子式テレビジョンシステムを開発
 1933 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』
 1934 フレンツェル/シュルテス：音ルミネセンス
 1934 ナチ、ニュルンベルク党大会「光のカテドラル」（等間隔に並んだサーチライトが空に向かって光線を放射）
 1935 デュシャン《Rotorelief》
 1935 ドイツでテレビ定期試験放送開始（ベルリンオリンピックの中継が行われる）
 1935 ストループ：ストループ効果
 1936 アメリカ、RCAが初のテレビ公共放送開始
 1936 ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』
 1936 リーフェンシュタール『意志の勝利』
 1936 デュシャン《浮遊する心臓》（強烈な赤地の上に青の心臓を描いた「カイエタール」誌の表紙であり、ヘルムホルツが1856年に提起した錯視と同様の効果を生成）
 1936-38 ボナール《浴槽の裸婦》
 1937-42 キースラー《ヴィジョン・マシン》
 1939 キルリアン：キルリアン写真
 1939-1945 第二次世界大戦
 1940 サルトル『想像力の問題』
 1941-45 ホロコースト
 1942 ホッパー《ナイト・ホークス》
 1942 ハクスリー『The Art of Seeing』
 1942-43 モンドリアン《ブロードウェイ・ブギウギ》
 1943/1970 リヒャルト・バウル・ローゼ《Thirty vertical systematic colour series in a yellow rhombic form》
 1944 ケベッシュ『視覚言語』
 1944 ジョン・ホイットニー & ジェームズ・ホイットニー《Five Film Exercises Film II-V》
 1944 ヴァザリリ《ゼブラ》
 1945 フロットホ、パーセル：NMR現象の観測
 1945 メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』
 1945 アメリカ：広島、長崎に原爆投下
 1946-58 アメリカ：ビキニ環礁核実験
 1947 モホリ＝ナジ『Vision in Motion』
 1947 デーネシュ：ホログラフィ
 1948 マティス《ロザリオ礼拝堂》（ステンドグラスと無色の陶板壁画）
 1948 ポラロイド社：インスタントカメラ「ポラロイド・ランド・カメラ」発売
 1948 ウィーナー『サイバネティックス』
 1949 ミリ《ピカソ、フラッシュライトの「ドローイング」》
 1949 RCA：3色カラー受像管開発
 1949 オーウェル『1984』
 1950 ギブソン『視覚世界の知覚 The Perception of the Visual World』

1951	ノーマン・マクラレン《アラウンド・イズ・アラウンド》[映画]	1966	ジャッド《無題(スタック)》
1951	フォンタナ《Ambiente spaziale》	1966	E.A.T.『9 EVENINGS——演劇とエンジニアリング』
1951	CBSが最初のカラーテレビ放送を開始	1966	ダン・グレアム《アメリカのための家》
1951-1992	アメリカ ネバダ核実験	1966	ギンター・ウッカー《電光彫刻》
1952	ベン・ラボスキー《Oscillon Number Four》《Electronic Abstractions》シリーズ	1966	商用通信衛星、インテルサットによる日米間テレビ中継開始
1953	山口勝弘『ヴィトリニス』シリーズ	1966	フーコー『言葉と物』
1953	ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』	1966	ギブソン『知覚システム論 The Senses Considered as Perceptual Systems』
1954	ミース+フィリップ・ジョンソン「シーグラム・ビル」[建築]	1966	グレゴリー『脳と視覚』
1954	シェーネ (W. Schöne)『絵画における光について Über das Licht in der Malerei』	1967	エーレンツヴァイク『芸術の隠された秩序』
1954	マグリット《光の帝国》	1967	タレル《Afrum-Proto》(クォーツハロゲンの使用。60年代後半にタレルはギブソンの生態心理学に関心を抱いている。)
1954	タウンズ：メーザーの発明	1967	ノーランド《Via Blues》
1954	ハクスリー『知覚の扉』	1967-68	ナウマン《Lighted Center Piece》
1955	バルトルシャイティス『アナモルフォーズ』	1967	ハウズフィールド：CTスキャナー考案(72年発表)
1955	ル・コルビュジェ「ノートル・ダム・デュ・オー・礼拝堂(ロンシャン教会)」[建築]	1967	ソニー：携帯用ビデオテープレコーダー「Portapak CV-2400」発売
1955	ノーマン・テイラー：CGの原型ともいえる「SAGE(セイジ)システム」完成	1967	ヤーバス『Eye Movements and Vision』
1955	カニッツァ：カニッツァの三角形(存在しない三角形が見える錯視)	1967	ドゥボール『スペクタクルの社会』
1956	ヘルベルト・W・フランケ《オシログラム》	1968	キューブリック『2001年宇宙の旅』[映画]
1956	アンベックス社、ビデオ・テープ・レコーダー(VTR)を発売	1968	サイファー『文学とテクノロジー Literature and Technology: The Alien Vision』
1956	「グループゼロ」結成(デュッセルドルフ、解散1966)	1968	「サイバネティック・セレンディビティ」展(ICA、ロンドン)
1957	ソ連、人類初の人工衛星スプートニク1号打ち上げ	1968	フランス：五月革命
1957	モートン・ハイリグ：頭部搭載型の立体映画ビューワ考案(ヘッド・マウンテッド・ディスプレイの原型)	1968	ソニア《BA-O-BA》
1957	ブルーメンベルク『光の形而上学——真理のメタファーとしての光』	1969	アーサー・アベル「Some Techniques for Shading Machine-Renderings of Solids」(レイ・キャスティング・アルゴリズムの創始)
1958-65	ヴァザルリ《ベータ》《ガンマ》	1970	大阪万博・パプシ館(ロバート・ホイットマン発案によるミラー・ドーム)
1958	ヒッチコック《めまい》[映画]	1970	ナウマン《Green Light Corridor》
1958	ジョン・ホイットニー：モーション・コントロール・カメラ(戦艦の機銃射撃照準装置に使用された装置を用いる)	1970	ジーン・ヤングブラッド『Expanded Cinema』
1958	NASA設置	1970	ファイバー光学
1959	アルンハイム『美術と視覚』	1970	クルー：走査型電子顕微鏡
1959	オッター・ピエネ《Lightballet》	1970	W・S・ボイル：CCD(Charge Coupled Device)を発表
1959	ソ連：ルーニク3号、月の裏側の写真撮影	1970	ゼロックス：パロアルト研究所設立
1959	ニコン：一眼レフカメラ「Nikon F」発売	1970	グレゴリー「インテリジェント・アイ」
1959	ゼロックス：コピー機「Xerox 914」開発	1971	ソフト・コンタクトレンズ製品化
1960	ゴンブリッチ『芸術と幻影』	1971	ラムテク・アイダグ社：「ラスタ・スキャンCRT」開発(ピクセル単位の画面表示が可能になる)
1960	ニコラス・シェーファー《クロノス5》	1972	フィリップス：光学式ビデオディスク「Video Long Play(VLP)」発表
1960-76	ブライオン・ガイシン《ドリームマシン》	1972	天体望遠鏡にデジタル検出器を設置
1960	メイマン：レーザーの発明	1973	アンソニー・マッコール《ライン・デスクライビング・コーン》
1960	日本：カラーテレビ放送開始	1973	ビヨトル・コヴァルスキー《ライトピラミッド》
1961	イッテン『色彩論』	1973	ラカン『精神分析の四基本概念』
1961	ライリー《加速円》	1973	コフマン『Camera Obscura, de l'idéologie』
1961	イヴ・クライン《ブルー・ファイヤー》	1974	カーン「インド経営大学」[建築]
1961	コダック：回転式スライド映写機「KODAK カルーセルプロジェクター」発表	1974	ウッディ・バズルカ、ノイズフィールズ《C-Trend》
1961	ユージーン・F・ラリー「Mosaic Guidance for Interplanetary Travel」(デジタルカメラの概念を最初に提起)	1975	マッタークラーク《Conical Intersect》(→1973 マッコール)に触発され制作)
1961	メルロ＝ポンティ没、『眼と精神』	1975	ジョン・ホイットニー《アラバスク》
1961	ベルリンの壁建設(-1989)	1975	天体望遠鏡にCCDを初めて設置
1962	フレヴィン《Icon V (Coran's Broadway Flesh)》(白熱電球の使用)	1975	光ファイバー通信システム
1962	ホロニアック：発光ダイオード	1975	フーコー『監獄の誕生』
1963	フレヴィン《The Diagonal of May 25, 1963》(フレヴィンが最初に蛍光灯を使用)	1976	リンドバーグ(D. Lindberg)『Theories of Vision from Al-Kindi to Kepler』
1963	アメリカから日本に初の衛星中継テレビ送信、ケネディ暗殺を伝える	1977	デ・マリア《ライトニング・フィールド》
1963	レイス、ウバニクス：レーザー光源を用いたホログラムの再生に成功	1977	チャールズ&レイ・イームズ《パワーズ・オブ・テン》
1963	アルパース『色彩構成』	1977-2003	シュトックハウゼン《光》[音楽]
1964	バイク《オシロスコープTV》	1977	アメリカで光ファイバーの電話ケーブル敷設開始
1964	ベンジヤス／ウィルソン：宇宙マイクロ波背景放射	1977	ヴィトゲンシュタイン『色彩について』(アンスコム編)
1964	メルロ＝ポンティ『見えるものと見えざるもの』	1978	バルトルシャイティス『鏡』
1964	マクルーハン『メディア論 Understanding Media』	1978	杉本博司《劇場》
1965	スミッソン《Enantiomorphic Chambers》(鏡の使用)	1979-	タレル《ローデン・クレーター》プロジェクト
1965	モリス《Mirrored Cubes》	1979	ウォーホル《影》
1965	「The Responsive Eye」展(ニューヨーク近代美術館)	1979	コダック：中央研究所が有機EL(OLED)を試作
1965	バイク《マグネット・テレビ》	1979	ギブソン『生態学的視覚論』
1965-66	トニー・コンラッド《フリッカー》		

1980 バイク《キャンドルテレビ》

1980 ジャスト／カーペンター：視線入力技術の端緒となる「Strong eye-mind Hypothesis」を発表

1980 バルト『明るい部屋』

1980 ヴィリリオ『Esthétique de la disparition』

1981 ハモンド『カメラ・オブスクラ年代記』

1982 リドリール・スコット《ブレードランナー》[映画]

1982 リズバーガー《トロン》[映画]

1982 「ツァイトガイスト」展(マルティン・グロピウス・パウ、ベルリン)

1982 デイヴィッド・マー『ビジョン——視覚の計算理論と脳内表現』

1982 大森荘蔵『新視覚新論』

1982 ミルネール『ファンタスマゴリア——光学と幻想文学』

1983 アルパース『描写の芸術』

1983 ドゥルーズ『シネマ 1——運動イメージ』

1983 国際度量衡総会において、真空中の光速が秒速299792458mと定義

1984 バイク《グッドモーニング、ミスター・オーウェル》

1985 ドゥルーズ『シネマ 2——時間イメージ』

1985 「非物質 Les Immatériaux」展(リオータル企画:ボンビドゥール・センター、パリ)

1985 ボイス《カプリ・バッテリー》

1985 つくば博・富士通バヴィリオンで3DCG《ザ・ユニバース》公開(世界初の立体OMNIMAX方式で上映)

1985 ファインマン『光と物質のふしぎな理論 QED』

1986 伊東豊雄『風の塔』[建築]

1986 富士フィルム：レンズ付きフィルム「写ルンです」発売(日本で最初のレンズ付きフィルム)

1986 キットラー『グラモフォン・フィルム・タイプライター』

1987 ダミッシュ『L'origine de la perspective』

1987 インゴ・ギュンター《C3I》

1987 ヌーヴェル『アラブ世界研究所』[建築]

1987 藤本由紀夫《PRINTED EYE》

1987 ハモンド『The Camera Lucida in Art and Science』

1988-98 ゴダール《映画史》[映画]

1988 インゴ・ギュンター《ワールドプロセッサー》

1988 大西洋横断光ケーブル

1988 富士フィルム：デジタルカメラ「FUJIX DS-1P」発売(画像をデジタル方式で記録した最初のカメラ)

1988 ヴィリリオ『La Machine de vision』

1988 ハル・フォスター編『視覚論 Vision and Visuality』

1989 太平洋横断光ケーブル

1989 ベルリンの壁崩壊

1990 マーティン・ケンブ『The Science of Art: Optical Themes in Western Art from Brunelleschi to Seurat』

1990 デリダ『盲者の記憶』(同名の展覧会をルーヴル美術館で開催)

1990 「ライトシード」展(ワタリウム美術館、東京)

1990 ハッブル宇宙望遠鏡打ち上げ

1990 アラン・ファン：光コンピューター試作

1990 Adobe Photoshop 1.0 リリース

1990 クレーリー『観察者の系譜 Techniques of the Observer: On Vision and Modernity in the Nineteenth Century』

1991 蔡國強《プロジェクト・フォー・E.T.》

1991 World Wide Web 開設

1992 ヨッヘン・ヘンドリックス「アイ・ドローイング」シリーズ

1992 アグネス・ヘゲドウシュ《ハンドサイト》

1992 ジャン＝ルイ・ボワシエ《めだま Globus oculi》

1992 W・J・ミッチェル『リコンフィギュアード・アイ』

1993 ゲージ(J. Gage)『Color and Culture』

1993 クラウス『The Optical Unconscious』

1993 オラファー・エリアソン《Beauty》

1993 クリステリアン・メラ《ヴァーチャル・ケージ》

1993 ザイエンス『光と視覚の科学』

1993 ジェイ『Downcast Eyes: The Denigration of Vision in Twentieth-Century French Thought』

1994 ミシャ・クバル《リフラクション・ハウス》

1995 バクサンドール『Shadows and Enlightenment』

1995 インゴ・ギュンター《ヒロシマーサンキューーインストールメント》

1996 逢坂卓郎《GROUND》

1996 八谷和彦《見ることは信じること》

1996 三上晴子《モレキュラー・インフォマティクス——視線のモルフォロジー》

1996 日亜科学工業(中村修二)：青色LEDを開発

1997 ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・ザニ「オーラ・リサーチ」シリーズ

1997 ストイキツァ『影の歴史』

1997 「光をつかむ——素材としての光の〈現れ〉」展(O美術館、東京)

1997 日本で通称「ポケモンショック」事件が発生(TVアニメ「ポケットモンスター」を見ていた視聴者が、フラッシュによる光過敏性発作の症状を起こす)

1998 ミシャ・クバル《space-speech-speed》

1998 ジョーダン・クランダル《Drive》

1998 ラマチャンドラン/ブレイクスリー『脳のなかの幽霊』

1999 ラファエル・ロザノ＝ヘメル《ヴェクトリアル・エレヴェーション》

1999 ミハエル・ザウブ & Supreme Particles《R111》

1999 IEEE802.11bが正式勧告、11Mbpsの無線LAN登場

1999 ソニー、フィリップス：DVR-Blue規格発表(Blu-ray Discの原型)

1999 クレーリー『知覚の宙吊り』

2000 高谷史郎《optical flat》

2000 畠山直哉『Underground』

2000 ドーベル・アイ

21世紀

2001 ホックニー『秘密の知識 Secret Knowledge: Rediscovering the Lost Techniques of the Old Masters』(1430年頃以降、画家がレンズや鏡などの光学機器を用いていたという説を提起)

2001 「Into the Light: the Projected Image in American Art, 1964-1977」展(ホイットニー美術館、NY)

2001 「Ctrl_Space」展(ZKM)

2001 ラファエル・ロザノ＝ヘメル《ボディ・ムーヴィーズ》

2001 010010111011101.org《Life Sharing》

2001 カオス・コンピュータ・クラブ《プリンケンライツ》

2001 NTT東日本・西日本：光ファイバーによるBフレッツサービス開始

2001 アメリカ同時多発テロ事件

2002 ハルン・ファロッキ《Eye/Machine》

2002 Blu-ray Disc (BD) 規格発表

2003 マリー・セスター《アクセス》

2003 エヴェリーナ・ドムニチ&ドミートリー・ゲルファンド《カメラ・ルシーダ：三次元音響観察室》

2003 ウスマン・ハック《Sky Ear》

2003 エキソニモ《RGB f_cker》

2003 ラファエル・ロザノ＝ヘメル《アモーダル・サスペンション》

2004 藤幡正樹《ルスカの部屋》

2004 安藤孝浩「フォトン・カウンティング」シリーズ

2004 コダック：スライド映写機、生産終了

2004 ノエ(A. Noë)『Action in Perception』

2005 カールステン・ニコライ《syn_chron》

2005 「light art from artificial light - Light as a Medium in 20th and 21th Century Art」展(ZKM、カールスルーエ)

2005 Google Earth リリース

2005 トム・スタッフォード/マット・ウェブ『Mind Hacks——実験で知る脳と心のシステム』

2006 「From Flash to Pixel」展(ZENDAI MOCA、上海)

2006 カールステン・ニコライ《fades》

2006 ベングト・ショーレン&アーダーム・ショムライ＝フィッセル with ウスマン・ハック《WiFiカメラ・オブスクーラ》

2006 アンソニー・マッコール《You and I, Horizontal》

2006 エキソニモ《SHIKAKUNOMUKOU》

2007 スタッフォード『Echo Objects: The Cognitive Work of Images』

2007 エイリアン・プロダクションズ《思考プロジェクター》

2007 ヘレン・エヴァンス&ハイコ・ハンセン(HEHE)《Pollstream - Nuage Vert》

2007 ソニー：有機ELテレビ実用化へ

2008 ポラロイドフィルム生産終了